

# この人に聞く! Interview

第4回

東洋エンジニアリング株式会社  
取締役会長 (前代表取締役社長)

ながまつ はるお

永松 治夫氏

世界の仲間と共に

～常に明るく前向きに「For the Project」～



1957年東京都に生まれる。

横浜国立大学工学部エネルギー材料研究施設修士課程修了

1981年4月 東洋エンジニアリング株式会社入社

2000年6月 Toyo Engineering & Construction Sdn. Bhd.  
Managing Director

2013年4月 東洋エンジニアリング株式会社執行役員、  
インフラ事業本部長代行 兼 インフラ事業本部  
インフラプロジェクト本部長

2016年4月 同社常務執行役員、インフラ事業本部長

2017年6月 同社取締役、常務執行役員、インフラ事業本部長

2018年4月 同社代表取締役、取締役社長

2023年6月 同社取締役会長 (現任)

2019年7月～2021年6月 一般財団法人エンジニアリング協会理事長

東洋エンジニアリング株式会社は、1961年の創業後、「エンジニアリングで地球と社会のサステナビリティに貢献する」ことを企業理念として、グローバルな舞台で、燃料アンモニア、合成燃料、SAFをはじめとする次世代エネルギーや循環型・低環境負荷分野等の「新技術・事業開拓」と、化学・肥料などこれまで実績を積み重ねてきた事業分野の「EPC強靱化」の2つの戦略に基づき様々な取組を進めている、日本を代表する総合エンジニアリング会社です。

永松様は、1981年に東洋エンジニアリング株式会社に入社後、機械設計部門を皮切りに、プロポーザル本部、産業システム事業本部、プラント事業本部、海外事業本部など、様々な部署で活躍され、

2018年4月からは同社の代表取締役社長、2023年6月からは、現職である取締役会長をなさっております。

また、2019年7月から2021年6月までの2年間、(一財)エンジニアリング協会の理事長もお勤めいただきました。

今回のインタビューでは、長年エンジニアリング事業に携わってこられた永松様から、ご自身の経験を基に、総合商社や他の製造業とも異なるエンジニアリング会社の魅力について、じっくり伺いました。

## お父様と二代続けて 東洋エンジニアリング株式会社に勤務

— 始めに、永松様が何故東洋エンジニアリング株式会社に入社されたのか、その経緯からお話いただけますでしょうか。

**永松** 実は、私の父も当社で働いていました。当時は、今と比べて社員数も少なく、父は1年の半分くらいは出張していました。世界各国を飛び回って、人形、置物、おもちゃを買ってきてくれ、エンジニアリング会社というのは、世界中いろいろな場所に行けて面白いところだな、というのが、子供の頃の感想でした。父の勤め先を書くこともあり、「エンジニアリング」というものを身近に感じていました。

週末は一緒に遊んでもらったりして、家族で楽しく過ごしていたのですが、1972年に飛行機事故で帰らぬ人となってしまいました。私が高校1年生の時です。

— 思春期の多感な時期でもあり、大変ショックでしたでしょうね。

**永松** 確かに大変ではあったのですが、夫を亡くした母親や、息子を亡くした祖母のことを考えると、「自分がしっかりして家族を守っていかねばならない」と考えました。また、「精神的な負のスパイラル」に陥ってはいけな、と思ったのです。友達や父の同僚の皆さんにも助けられて、何とかこの苦境を乗り越えました。

— 周りの支えがあったのに加えて、永松様ご自身の精神力が強かったのでしょうか。ところで、その後、横浜国立大学工学部に進学されたのですね。

**永松** はい。学部での卒論テーマに「脆性破壊」を選び、大学院修士課程まで進みました。ちなみに、卒論の英文要約のタイプ打ちは、妻に助けてもらいました。

私が学んでいた研究室では、当時としては珍しく、産学連携研究を積極的

に行っていました。1978年に、宮城県沖地震という大規模な地震が起こり、仙台市の石油タンクから石油が漏れる、という被害が出ました。そこで、このタンクを設計施工したエンジニアリング会社から、共同研究の申し出があり、私もこれに参加することとなりました。その会社は当社ではなかったのですが、「父親と同じ会社に行かなくてもいいか」と思い、その会社に就職しようか、と考え、家族にも話をしました。ところが、そのことが家族を通じて当社の関係者に伝わってしまい、「是非東洋エンジニアリングに來い」という話になり、当社に入社することとなりました。

## 最初の配属先は設計部門 ～勉強会ではボコボコに～

— 入社されて、最初の配属先は設計部門だったのですね。

**永松** タワー、ベッセル、熱交換器などの圧力容器を設計する部門でした。まず感じたことは、皆さんが大変優秀な方々だということです。当該部門の先輩に、後に当社の社長となる中尾さんがいたのですが、彼が中心となって、若手4人でASME規格の勉強会を定期的に行いました。持ち回りなので、4週に1度は題材を見つけて先輩3人の前で発表せねばなりません。突っ込みが厳しくボコボコにされ、当日は会社を休もうかと思ったことも何度もありましたが、お陰で圧力容器の設計のイロハを学ぶことができました。

— 入社早々大変でしたね。そのほか、大変だったことはありますか。

**永松** 1983年に、マレーシアのガスプラントのサブアサインとなり、Export Terminalの二重殻低温タンクの設計、製作、現地工事、そして試運転まで一貫通貫で担当しました。その際、作業効率を上げるために、側板を地上で溶接してから上架したところ、真円であるべきタンクが、ちょっと「かぼちゃ風」

になってしまい、客先から「作り直せ」とのクレームを受けてしまいました。先輩がFEM解析による健全性を客先に説明して、何とか事なきを得ましたが、冷や汗をかいてしまいました。「次の設計では、こうしたミスを絶対にしないぞ」と思っていたら、プロポーザル本部に異動になってしまいました。

## 必死に勉強して 「海外進出の専門家」に

— 異動先では、どのようなお仕事をされたのですか。

**永松** プロポーザル本部では、プロジェクトの積算などを担当していたのですが、2年ほど経って、新設された産業システム事業本部に異動となりました。

この本部での仕事でまず思い出すのが、ある医療機器メーカーにおいて、海外進出の専門家として、3か月間講義を行ったことです。当時、私の海外経験といったら、マレーシアでの約2年間の勤務だけでしたので、「そんな無茶な!」という心境でしたが、自分を奮い立たせ頑張るしかありませんでした。頼りになるのは当社のマニュアルだけで、その内容を必死に勉強しお客様の前で講義する、という薄氷を踏む思いを3か月間続けました。結局、先方の海外進出計画は延期となり実現しませんでした。当社のマニュアルの難さを心底感じましたし、その後の私のキャリアにとっても、当時の勉強が役立ちました。

## Toyo-Malaysiaの 立ち上げに尽力

— いろいろとご苦労をされているのですね。その後、思い出に残るお仕事といったら、どのようなものがあるのでしょうか。

**永松** 米国やマレーシアにおけるブラウン管工場の建設などを担当していましたが、マレーシアでの仕事はかなり



2000年頃、Toyo-Malaysia スタッフ達と



2010年代前半、FPSOの完成(出航・Sail Away)  
客先PETROBRAS社・協業先MODEC社・BrasFELS社  
(Shipyard)メンバーと

多くなっていました。

そうした中、当社の中で、「営業拠点であるToyo-MalaysiaをEPC拠点とし、メンテナンスや中小規模のプロジェクトを自前で遂行するようにすべきだ」との話が浮上し、私も「大賛成です」と言ったところ、なんと私がその責任者(社長)に任命されてしまいました。今にして思えば、43歳の私をよく社長に選任したな、と当時のマネジメントに感謝する次第です。ちょうど2000年代前半で、当社の業績も厳しく「Toyo-Malaysiaを、できるだけ早く一本立ちさせくれ」と言われていました。マレーシアのプロジェクトで活躍していた現地の方々5、6人を社員として迎え、皆で業容を整えるとともに、案件獲得に奔走しました。お陰様で、Toyo-Malaysiaは、4年後には従業員100人、売り上げ30億円の小さいながらもEPC拠点となりました。

— 永松様は、あっさりとおっしゃいましたが、マレーシアで会社を発展させることは、並大抵のことではないと思います。技術的な問題以外に、労務、経理、法務といった様々な仕事をどのようにこなされていたのですか。

**永松** 私自身は、全ての仕事をこなせるスーパーマンではないので、会社の内外で「それぞれの仕事をできる人をお願いする」ということで乗り切りました。私の場合、10年間くらいマレーシアにいたので、「人間関係のネットワーク」が出来上がっていたのだと思います。そこさえつかめれば、仕事の8割は終わったものとも言えます。

### 海外勤務は、できれば「家族同伴」がベスト

— 永松様のご経歴を見させていただくと、国内勤務22年間に対し、マレーシアで14年間勤務されています。マレーシアには、ご家族も一緒に行かれたのですか。

**永松** その通りです。殆どの期間を運良く家族同伴で行くことができました。最近の若い又は中堅の社員も、海外に行く時には家族帯同を希望するケースが多いと感じます。仕事を終えて帰宅しても一人きりというのでは、ストレスが溜まります。本人にとっても家族にとっても、海外生活は刺激的だと思うので、社員の皆さんには、「是非家族帯同で海外勤務をしてほしい」と伝えています。

私のケースを例に挙げれば、娘は、小学校2年生の時にマレーシアに行き、最初は日本人学校に通っていましたが、中学校2年生の3学期から、地元のインターナショナルスクールに通うようになりました。教育は米国式なので、バドミントン、テニスとオーケストラの3つのクラブに入り、様々な国の人と知り合いになりました。当然英語の実力も、親とは比べものになりません。また、当時住んでいたマンションには、テニスコートとプールがついていましたから、妻は、テニスやゴルフを楽しんでいました。娘が高校3年生の時に、私は日本に帰国することとなったのですが、娘の進学のこともあり、私だけが日本に帰る「逆単身赴任」となりました。

—ところで、日本人は一般的に英語が苦手、と思うのですが、永松様は、どのように英語を勉強されましたか。

**永松** 私の大学は横浜にあったので、結構外国人の友達もいて英語に触れる機会がありましたが、本格的に勉強したのは、工作上、どうしても使わなきゃいけない、となった時からです。そうなれば、勉強に身も入るし、コミュニケーションが取れるようになります。英語以外の言語についても、同様だと思います。

### 多種多様な仕事をできるのが、エンジニアリング会社

—ご自身の人生を振り返ってみて、東洋エンジニアリング株式会社で働き続けて、満足されていますか。

**永松** 大変満足しています。私は、海外における仕事に興味がありましたが、大学で理科系の勉強をしたので、商社での仕事は少し違うな、と思っていました。他方、一般の製造業に入社すると、基本的には工場と同じ種類の製品を造り続けることになり、これも何か刺激が足りないのでは?と若気の至りで考えていました。その点、エンジニアリング会社は、海外勤務や営業ができ、かつ、私が学んできた技術も仕事に使える、というメリットがあります。

私の仕事の内容の変遷からもお分かりいただけるように、エンジニアリング会社には、設計、調達、工事、営業など様々な部門があります。個人の多様な能力を引き出す仕事がたくさんあり、「社内転職」が可能な会社である、と言ってもいいかもしれません。

エンジニアリング会社には、ゼネラリストとスペシャリストがいます。ゼネラリストは、様々な経験を通じて、全体を俯瞰できる能力を持つマネジメントタイプの人であり、私もこのタイプに属するでしょう。もう一つのタイプは、スペシャリストで、例えば、「設



2024年クアラルンプールで、Ethylene Malaysia 社の元社長と久々の再開



2024年、社内の屋外“ビアパーティー”でのバンド姿

第2は、人とのつながり、ネットワークを大切にすることです。お客様との関係でも、社員同士の関係でも、相手の気持ちを考え、相手の長所をよく見るようにすることが重要です。エンジニアリング会社の社員にとって必要なのは、「プロジェクト完遂のために、一緒に何かに取り組み仕上げる」よう、常に明るく前向きになることだと思っています。当社の実施する「エンゲージメント・サーベイ」によれば、「当社は、人の横のつながりに関する満足度が高い」との結果が出ており、この伝統を維持していきたいと思っています。

第3は、スペシャリストはもちろん、ゼネラリストであっても、コアな得意分野を持つことです。今後AI利用が普及していく中で、詳細設計のような業務はAIに委ね、より創造的な業務にチャレンジする時代になると思います。是非、様々な勉強を続けていってほしいと思います。

— 本日はありがとうございました。



### インタビュー後記

永松治夫様に、(一財)エンジニアリング協会の理事長をお勤めいただいた時期は、ちょうどコロナ禍と重なり、残念ながらあまりお話をする機会に恵まれませんでした。したがって、今回、永松様にインタビューを行って、改めて永松様の仕事に向けた考えや、明るいお人柄を知ることができました。

永松様は、ドラムを19歳の頃から趣味となさっておられます。最近は小さいライブハウスを、何組かのバンドで借り切って、演奏会をされることもあるようです。かっこいいなあ。

聞き手：当協会専務理事  
前野 陽一

計のプロフェッショナルになる」といったタイプの方です。ただし、スペシャリストを目指す場合でも、設計部門にいただけでは、「設計のプロフェッショナル」にはなれません。自分が設計したものが、建設工事を経て、試運転までいってお客様に引き渡されるまでの一連のプロセスを経験して、改めて設計のやり方を見直す、という経験を積んでこそ、初めて「設計のプロフェッショナル」として大成するのです。こうした経験を積んだ人は、引く手あまたであり、高齢者となっても就職先に困ることはないでしょう。

### 若い世代に伝えたい言葉

— 今までの経験を踏まえて、学生を含む若い方々にお伝えしたいことをお願いします。

**永松** 第1は、エンジニアリング会社は多種多様な職種があるので、仮に最初に配属された部署が自分の希望と違ったとしても、そこで頑張ることです。例えば、設計を一生の仕事にしたいと考えている人も、調達や工事、さらには営業のことが分かってこそ、真に役立つ設計ができる専門家となるのです。



本資料の複製・転載・改変・再配布を禁止します。 No part of this document may be reproduced, reprinted, modified or distributed.

